

今日朗読された聖書箇所は、コルネリウスという人と、ペトロの出会いを記した聖書箇所ですが、読めば読むほど興味深い、おもしろい、そういう聖書箇所です。

ペトロが滞在していたヤッファの町から北へ約50キロほど行ったところにカイサリヤという町がありました。サマリヤの一角にある街ですからユダヤの町なのですが、住民はユダヤ人よりギリシャ人の方が多かったとも言われています。海に面したこの町は交通と貿易の要衝（ようしょう）として栄えた港町です。

この町は、ギリシャ語を使う外国人、ギリシャ語を使うユダヤ人が多かったです。

そこにユダヤ教の会堂も当然あり、ギリシャ語での礼拝も行われていたでしょう。

コルネリウスという人はローマの軍隊である「イタリア隊」と呼ばれる部隊の隊長をしている人でした。彼がどういういきさつでかはわかりませんが、ユダヤ教の会堂に出入りするようになり、やがて神と出会い、神を信じる者とされ、しかも一家そろって聖書の神を信じる者とされ、神と人にとり真摯に仕える者になっていきました。これは驚くべきことです。

コルネリウスは、ローマ軍の隊長。ユダヤを制圧している軍隊の隊長です。その人が被制圧者の宗教に入信するのですから、これはやはり相当めずらしいケースですし、普通はそうはならない。つまりコルネリウスという人は、真理というものに、開かれている人だったのでしょう。ローマにはない信仰を生きる、ということは自分自身が変わっていくことですから、これは小さなことではありません。

さてコルネリウスは祈っていました。午後3時の祈りの時、彼は幻の中で、天使と出会い、その語りかけに聞くのです。天使は彼に言いました。「あなたの祈りと施しは、神の前に届き、覚えられた。今、ヤッファへ人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。」

天使は二つのことを彼に伝えました。一つは、あなたの祈り、あなたの日々の歩みは神に覚えられ、受けとめられている、ということ。もう一つは、ペトロという人物を招きなさい、ということです。それはペトロからイエス・キリストの福音を彼が聞くためです。

コルネリウスは急いで、二人の召使と、一人の兵士を呼び、ヤッファにペトロを招くために遣わすのです。

一方ペトロはそのころ、滞在していたヤッファの町の家の屋上に祈るために上がっていました。彼が空腹を覚え、家の人たちが食事の準備をしているとき、ペトロは幻のうちの一つのしるしを見るのです。それは天が開き、大きな布のような入れ物が、四角でつるされて、地上に降りてくる光景でした。その中にはあらゆる獣、空の鳥が入っていたのです。そして、「ペトロよ、身を起して、屠って食べなさい。」という声が聞こえたのです。彼は即座に応えます。「主よ、とんでもないことです。清くないもの、けがれた者は何一つ食べたことはありません。」ペトロはイエス・キリストを信じる者とされていましたが、なお、ユダヤ教のしきたり、食物規定を守っていました。ユダヤ教の食物に関する規定には長い歴史があります。今祈祷会で読んでいる出エジプト記には詳しく出てきますが、もともと人間の罪の贖いのために献げることのできるもの、それが清いものでした。やがてそれが人間の食べるときの規定に広がっていったのです。ユダヤの人々は、この規定を厳格に守っていました。しかし、イエス・キリストがこの世に遣わされ、主イエスご自身が神への贖いの供え物となってくださった、十字架の死です。それによって神への犠牲の献げものはもはや必要なくなった。そしてどんなに罪深く、清くない人間であっても、キリストの十字架に担われ、活かされている以上、清いとか清くないといったことそれ自体が、もはや意味をなさない。つまりイエス・キリストを信じる者にとって、食物規定そのものが廃棄された。

ペトロは、神殿で説教し、イエス・キリストの十字架と復活による救いを語ってきた人です。その彼が、ユダヤ教で守られてきた食物規定を今も、何の疑いもなく、むしろ、自分がそれを守ることを誇りのようにして守っているのです。おかしい話ですよ。後にこのことをめぐってパウロとの間で、議論が起きる、そういう事柄です。

ペトロは、一人のユダヤ人として、ごく当たり前に、子どもの時からの日常習慣として食物規定を守ってきたのだと思います。食物規定というのは、さしあたり誰にも迷惑かけない、自分の事柄、自分が食べない、というだけのことだと思っていることが多いのかもしれませんが、しかし、実際には、食物規定は、自分がそれを食べなければいい、というだけではなく、食べている人との距離感が生まれてくる。例えばユダヤ人は自分たちにとっての禁止食物を食べている人とは同席しない、ということになり、やがてそれは、外国人とはなるべく接触しない、なぜなら彼らはけがれた食物を食べる人たちだから、となっていくのです。ペトロ自身もそういうことをしてきた。つまり食物規定は、差別と

いうとても広い裾野へとつながっているのです。

「神が清めたものを清くなどない、とあなたは言うてはならない。」との声をペトロは聞きます。だがペトロは、いくら神からの声であっても、納得できなかった。だからこそ、ペトロに対する天の声は三度も繰り返されたというのです。彼の中には、厳然と清くないもののリストがあったのです。どうして食物規定を取っ払う必要があるのか、彼にとって容易に理解できる話ではなかった。

ここにはイエス・キリストの福音とすでに出会っているのに、その福音の光の中に照らし出された日常を変えようとしなない、頑固な人間の姿があると思います。頑固、というのは言い過ぎだと思ふ人があるかもしれませんが、イエス・キリストの福音に出会ったペトロがここに至るまで、清いもの、清くないものにこだわって、食事をしてきたことそれ自体が頑固なのです。福音を信じて、自分の生活スタイル、生活習慣を見直していく、そこには、自分が変わっていく、という大きな課題があります。

ペトロが天使の言葉を思いめぐらしているとき、彼の滞在している家にコルネリウスの使いの者たちが到着します。ペトロは霊の示しを受け、「ためらわないで、その3人の者と一緒に出発し、彼らと共にいきなさい。わたしが彼らを遣わしたのだ、」との言葉を受けます。ためらわないで、という言葉は「差別しないで」、という言葉です。ひじょうに示唆深いと思います。

ペトロから見て、この3人は外国人です。これまでほとんどユダヤ人としか交流してこなかったペトロにとって、遠ざけていた人々です。自分からは何ら積極的に出会おうとしなかった人たちです。だが、霊の示しは差別しないで、今ここで出会って、一緒に行きなさい、だったのです。

ペトロと3人はこの家で出会います。ペトロはあなた方が探しているのは、わたしだ、といい、なぜここに来られたのですか、と尋ねます。3人は自分たちが訪ねてきたいきさつを語ります。百人隊長のコルネリウスのこと、そして彼があなたを家に招いて話を聞くようにと、聖なる天使からお告げを受けたこと、を語るのです。

ペトロは、ようやく自分が屋上で幻の中で見たこと、そのしるしと、その後に関こえた声、それが自分に示そうとしたことがわかってくるのです。

あの空から降りてきたすべての獣や空の鳥、そのすべてを神が清めてくださっている、という。これは清いがこれはけがれていると言ってきた自分に対して、神がすべて清めてくださっているという。それはまさに、ユダヤ人であろうが、外国人であろうが、すべてキリストによって愛され、担われ、十字架で背負われている者なのだ。だから、あなたはその垣根を越えて、ユダヤ人であ

ろうがギリシャ人であろうが、等しく福音のために遣わされていくのだ、そういうメッセージの込められたしるしだったのではないか。ペトロはそのことに気づいていくのです。

翌日ペトロは彼らとともに出かけ、カイサリヤに到着。ペトロとコルネリウスは出会うのです。ペトロは彼に向かって、自分が幻の中で神によって示されたことを語るのです。一方、コルネリウスも、天使をから伝え聞いたことを語り、二人はくしくも自分たちに神が示されたことをシェアし合う。分かち合うのです。

二人の真理の前で自分を変えていく姿は、当然ですが微妙に違います。しかし、二人には共通することがあります。それは、二人の「聞く」姿勢です。

「信仰は聞くことによる」、「聞くことはキリストの言葉から来る。」という聖書の言葉がありますが、二人は、それぞれ、天使からの声、天からの声に聞こうとするのです。そこには今の自分を変えていかななくてはならないこともあるのです。聞く、とはそういうことです。自分にとって都合のいいことだけをチョイスするわけではない。コルネリウスは天使から、ペトロを招きなさい、と言われたときから、とにかくこの人から神の言葉を聞くのだ、と思い定めていたのでしょう。彼は、ペトロが来るということで、親類や親しい友人を呼び集めていました。自分だけでない、自分の近い人に一緒に聞いてもらいたい、という願いを持っていた。本当に愛する者とはこのことを分かち合いたいと願ったのです。このコルネリウスの態度は、わたしたちに大事なことを示しているように思います。そしてペトロは、天からの声に葛藤を覚えながらも、思案に暮れるほどに行きつ戻りつしながらも、その語りかけに服従していくのです。二人の「聞く」姿勢から、わたしたちは現実的に学ばなければいけない。二人に共通しているのは、聞く姿勢です。それは、二人の、今自分は神のみ前に立っている、という信仰の姿勢でもあるのです。わたしたちは与えられている人生の時間の中で、どう聞いて生きるか、誰と共に聞くか、それがこの聖書から問われている。今、神のみ前に立つことを、各自大事にしていきたいと思いません。